

結
願

ま
ま
ひ
る
の
遍
路
旅

河
野
輝
夫

登場人物表

河合まひる（二六）

東京の旅行出版社社員

藤本翔太（二六）

まひるの恋人。東京の大手銀行員

桜川みどり（三八）

まひるの上司。月刊誌副編集長

「お遍路さん」

宮下麻未（二三）

謎の美人お遍路

大柴柘植雄（六五）

元お笑い芸人のベテランお遍路

高橋祐輔（二四）

大学卒業後、就職せずアルバイト生活

曾良幸房（六〇）

まひる達に人生の奥義を説く僧侶

1 山道（イメージ）

急峻な山道を登る若い女性。
ハアハアと荒い息遣い。
白装束姿。手に金剛杖、頭に菅笠。
樹木が生い茂り、薄暗い山道。
すれ違うお遍路たち。
ますます荒くなる息遣い。
と、石に躓き、崖から転落する。

2 東京・まひるのアパート（朝）

ベッドから転落する河合まひる（二六）。
恐怖で眼を見開き、呆然としている。
ハッと気が付き、枕もとの時計を見る。
七時四〇分である。

まひる「ヤバっ！」

飛び起きるまひる。

×

×

×

スーツに着替え、慌てて玄関に走り、躓いてコケる。
ハイヒールを履こうとして、また戻り、

玄関脇の鏡を見る。
手で乱雑に髪を整え、飛び出す。
ボタンと大きな音。

3 東京・出版社社屋

中低層ビルが連なる下町の風情。
スカイツリーが遠景に見える。
五階建てのビル。
玄関に「東京エール旅行出版」の看板。

4 同・編集部

編集部入口に「月刊トラベラー編集部」
の案内板。
部員七名ほど、デスクで仕事中。
奥に副編集長の桜川みどり（三八）。
編集長の中野大樹（四五）、入ってくる。

中野「まひるは？」

部員「打ち合せに出かけています。山本先生
の自宅です」

まひるの席。乱雑に散らばっている。

中野「山本先生とこ？大丈夫かなあ。まひる、方向音痴だから。この前も内回りと外回り、間違えちゃうしさ」

部員たちの分かるだろ、いや、まひるだからなあ、の声。

席についた中野、隣の桜川に話しかける。中野「副編集長、今度の特集だけど、四国遍路はどうか。前のインド放浪記が好評だったから」

桜川「いいですねえ、お遍路。うちの読者が喜びそう」

中野「そうなんだよ。今回も外部のライターじゃなく、自前で。誰がいいかな（と、周りを見渡す）」

一斉に顔を伏せる部員たち。

桜川「まひるがいいんじゃないですか」

中野「まひる？うーん」

桜川「私に任せて（と笑顔）」

5 東京・居酒屋（夜）

カフェ風のおしゃれな居酒屋。

十名ほどの客、全員若い女性。

テーブルを挟んで座る、桜川とまひる。

まひる「(空のグラスをドンと置き)無理です。

四国なんて一度も行ったことないし」

桜川「新鮮でいいじゃない」

まひる「レンタカーでも十日はかかるでしょ」

桜川、従業員にレモンチューハイ追加ね

と言っ、

桜川「何言ってるの、歩きよ、歩き遍路。二

か月かな」

まひる、つまんでいた唐揚げをポトリと

落とし、

まひる「(箸を左右に振りながら)無理、無理。

無理ですって」

桜川「何言ってるの。まひるだからいいのよ。

華があるからねえ、あなたのレポート」

まひる「(得意げに)そ、そうかしら」

マスターをちらっと見る桜川。

苦笑するマスター。

桜川「貴方のためにと、思って推薦したのよ。
チャンスを生かさなきゃ（と肩を叩く）」

まひる「うーん・・・」

まひる、届いたレモンチューハイを一気に飲み干す。

桜川、バッグから取り出した月刊トラベラーを広げる。

桜川「五月号からの4回シリーズね。タイトル決めたわよ。『ぶっ飛び！まひるのお遍

路日記』」

まひる「はあっ？」

桜川「頼んだわよ、期待してる。出発は来週ね」

まひる「げっ」

×

×

×

居酒屋を出る二人。まひる、桜川と別れ、繁華街を歩きながら、パワハラだ、訴えてやるとぶつぶつ。

—タイトル—

6 徳島県鳴門市・一番札所 霊山寺

霊山寺山門前に立つまひる。
真っ赤なポロシャツ、ミニスカート姿。
横を通り過ぎる白装束姿のお遍路たち。
チラチラと場違いなまひるを見る。
険しい顔つきのまひる。

まひるの声「だからぁー」

7 東京・翔太のアパート（回想）

藤本翔太（二六）、台所で紅茶を入れてい
る。

まひる、座っている。

まひる「四国よ、四国」

翔太、紅茶を運び、座る。

テーブルにケーキ二個。まひる側の一個
は半分食べている。

まひる「聞いてよ翔太。私、お遍路に行くの」

翔太「いいじゃん、四国。頑張っ」

まひる、翔太のケーキにフォークを指し、
食べる。

まひる「（食べながら）これも美味しいわね・・・いや、二か月も会えないのよ」

翔太「だって、仕事でしょ」

まひる「そうだけど・・・そんな長い間会えなくて、寂しいよ、辛いよってないの、翔太」

翔太「うん？（戸惑いの笑い）」

机の上に二人の写真。

洗面所にまひると翔太の歯磨きセット。

まひる「うちら大学時代からの付き合いだから」

翔太「もう六年になるね」

まひる、バリバリとケーキを食べ続ける。

8 徳島県鳴門市・一番札所 霊山寺

まひる、ふっと息を吐いて歩き出す。

白装束、完璧なお遍路姿の大柴柘植雄（六五）、まひるに声を掛ける。

大柴「ちよつと、ねえちゃん」

まひる「私？」

大柴「そや。あんた、なんちゆう恰好してんねん」

まひる「変ですか？」

大柴「そんな短いスカート。階段が多いんやから、お寺は」

まひる「見られても、気にしませんよ」

大柴「こつちが気にするわ。あと、雨が降つたらどうすんの」

まひる、リュックから傘を出して、得意げに、

まひる「ちゃんとう用意してます」

大柴「それでは、山は歩けんわ。ほいで、納経帳は？」

まひる「納経・・・帳？何ですか、それ」

大柴「こりや、アカン。ねえちゃん、ワシについてきなはれ。あんじょう、したる」

まひる「ねえちゃん、じゃありません、私、河合まひるです！」

大柴「あーわかった、まひるちゃん。ワシは大柴や。歩き遍路三十回目。こつちやで」

大柴について歩くまひる。

9 東京・出版社編集部

窓際の中野と桜川。

中野「服装とか持っていくものとか、何も言
ってないの」

桜川「そう」

中野「大丈夫かな。まひるだからさあ」

桜川「いいの。かわいい子には旅させると言
うでしょ。正にそう。自分で苦労して学ん
でいくの」

中野「きつつい山道あるじゃん・・・遍路こ
ろがしって言ったつけ」

桜川「(笑って)楽しみよね。獅子は崖から子
供を落として、這い上がってきた子供だけ
を育てるといいうじゃない。それよ、まひる
ころがし。あっはははは」
呆れる中野。

地藏寺の山門。

白装束に菅笠、金剛杖、正装のまひる。
境内で鐘をつくまひると大柴。

燈明、線香をあげ、本堂、大師堂にお参りし、納経所に立ち寄る。

大柴「だいぶ、様になってきたな」

まひる「師匠のおかげです」

大柴「ん？師匠か・・・そんな時代もあったな」

まひる「えっ？」

いやいやと手を振る大柴。

すぐ後ろに、中年女性のお遍路。

女性「お嬢さんは、どちらから」

まひる「東京です。旅行雑誌の取材なんです」

大柴「えっ、取材！まひるちゃん、仕事で来てるんか・・・その割にはお遍路のこと、

何も知らんのやな」

まひる「それが私のいいところ」

ずっこける大柴。

女性「若いうちは、何でも経験よ」

大柴「そうや。お遍路した意味は、最後に分かる」

ふーん、とつぶやくまひる。

11 徳島県阿波市・遍路道

字幕スーパ「徳島県阿波市」

民家が連なる遍路道。

先を歩く大柴。少し遅れてまひる。

中年女性、走ってくる。

女性「お遍路さん！」

振り向くまひる。

女性、手にお菓子とドリンク。

女性「お接待させてください（と、手渡そう

とする）」

まひる「（手を振りながら）いや、ただけな

いです」

戸惑う女性。

大柴「（駆け寄り）お接待やから、有難くいた

だかな。（女性に）ありがとうございます」

まひる、受け取る。

大柴「まひるちゃん、納札を渡さんと」

まひる「納札？・・・」

大柴「白い小さい紙の札、買ったやろ」

まひる「あ、あれ。(納札を女性に渡し) ありがとうございます」

女性「気を付けて下さいね(と手を合せて拝

む)

まひる「私、拝まれた・・・」

大柴「お遍路さんは、お大師さまと一体やから」

大柴、まひるの金剛杖の「同行二人」を差して、

大柴「この同行二人って意味分かるか」

まひる「いえ」

大柴「自分一人やない。お大師さまと一緒に修行してる、という意味や」

まひる「ふーん」

大柴「ホンマに分かってんのかいな」

また歩き出す二人。
軽トラック、近づく。

運転手「お遍路さん、乗っていき」

まひる「えっ、でも・・・」

運転手「ええから。お接待や」

とまどうまひる。

大柴「すんまへん。歩き、と決めてますんで」

運転手「そうかあ。じゃ、頑張っ！（と手

を振る）」

大柴「ありがとうございます」

軽トラック、去っていく。

大柴「お接待は、基本ありがたいただくも

んやけど、断っていいもんもあるからな」

まひる「さすが、師匠」

大柴「それ、やめろって」

12 徳島県吉野川市・遍路宿「吉野」（夕方）

「吉野」の看板。

玄関を開けるまひる。

まひる「こんにちは」

女将出てきて、まひるでなく金剛杖に向
かって、

女将「長旅、お疲れ様です」

金剛杖を受け取り、先をタオルで拭く。
ようやく、まひるに向かつて、

女将「いらつしやいませ、どうぞ」

まひる「（戸惑い）・・・はい、よろしくお願
いします」

1 3 同遍路宿・まひるの宿泊部屋（夜）

床の間の掛け軸横に金剛杖。

失礼しますの声。女将、入ってくる。

女将「お食事の用意ができました」

1 4 同遍路宿・食堂（夜）

畳敷きの広間に十名ほどの宿泊客。

精進料理のお膳が並んでいる。

まひると大柴、同じテーブル。

大柴「お接待の動機は、色々あると思うねん」
まひる「という」と

大柴「まずは、自分が遍路に行けないから、
身代わり巡礼を頼む気持ち、また、良い行

いをして功德を得たいという信仰心、それから、苦勞している歩き遍路に対する同情心もあるな」

大柴、まひるにビールを注ぐ。

まひる「あ、どうも」

大柴「でも根底にあるのは、他人の喜びを自分の喜びとする利他の心だと思う。そやる、まひるちゃん」

まひる「そうです（と、いい加減）」

笑う大柴。

突然、まひるが大声で、

まひる「私、お遍路に出る時、脅かされて。遍路ころがしという険しい山があるから気を付けなさいって。大丈夫じゃん。へっ
ちやら」

隣のテーブルの客、一斉にまひるを見る。

片隅に、美人のお遍路、宮下麻未（二三）。

皆、突然笑い出す。

まひる「えっ、何？」

皆、まだ笑っている。

心配顔の麻未。

15 同遍路宿・玄関（早朝）

鳥のさえずり。

客、大勢出ていく。大柴の姿も。

女将「行ってらっしゃい。お気を付けて」

16 同遍路宿・食堂（朝）

まひる、入ってくる。

一人分の食事のみ。

まひる「あれっ、皆は」

女将、おにぎりを持って入ってくる。

女将「皆さん、もう出かけられましたよ。今

日はきつい一日になるからって」

まひる「げっ、やられた。師匠、冷たいなあ」

女将「はい、おにぎり」

まひる「わっ、でかい！」

女将「今日の焼山寺は、コンビニも何にもな

いから」

まひる「あ、ありがとう」

女将「頑張れ！（と背中を叩く）」

不安げなまひる。

17 徳島県神山町・十二番札所焼山寺遍路道

極端に急峻な山道。

うっそうと茂る樹木。

遠くに倒れているお遍路が見える。

まひるである。

まひる「もう・・・だめ」

投げ出した金剛杖を手にしようとする
が届かない。

と、誰かか手渡す。

麻未である。笑顔がまぶしい。

まひる「ありがとう」

麻未の手を借りて座るまひる。

絆創膏を手渡す麻未。

靴を脱ぎ、絆創膏を貼るまひる。

まひる「あなたも一人？」

麻未「はい。初めてのお遍路です」

まひる「私も・・・あ、落ち着いたら、お腹

すいちゃった」

麻未「（笑って）じゃ、お昼ごはんにしますか」

まひる、リックからおにぎりを出す。

おにぎりに添え書きが付いている。

『険しい山道ですが、足は大丈夫ですか。』

あともう少しです。頑張ってください！』

涙を拭うまひる。

一緒におにぎりを食べる麻未。

まひる「私、河合まひる」

麻未「宮下麻未です」

まひる「麻未ちゃん」

にっこり笑う麻未。

鳥のさえずり。樹木が風に揺れる。

食べ終わり、ゆっくり立ち上がって、歩

き出す二人。

遍路道の木の枝に短冊。

『元気を出して』『一歩ずつ前進』

山道を登る二人。

時折、コケるまひるを手助けする麻未。

18 徳島県徳島市・遍路道

字幕スーパ―「徳島市」

一人、とぼとぼ歩くまひる。

時々立ち止まり、靴を脱いで足をさする。

また歩く。

19 徳島県徳島市・遍路宿「だいにち」

よれよれで玄関に入るまひる。

20 同遍路宿・まひるの宿泊部屋（夜）

布団の上にひっくり返っているまひる。

携帯を手に取り、電話。

21 東京・翔太のアパート（夜）

翔太、本を読んでいる。

携帯が鳴り、翔太とる。

翔太の声も聴かずに、

まひるの声「私、お遍路やめる」

翔太「・・・」

まひるの声「聞いているの」

と、背後から肩を叩く男。大柴である。

大柴「どないだ。頑張ってるか」

はあ、と生返事のまひる。

おばあさん近づいて、まひると大柴に接待袋を手渡す。お礼を言つて、近くのベンチに座る二人。

大柴「接待袋を開けながら」ワシ、初めてお遍路した時、このお接待がうれしくてな」

まひる「タイミングもいいですもんね。のどが渴いた時にドリンク」

大柴「ところがや。三回目かな、さっきみたいに接待袋を開けたら、飴玉二個しか入ってなくてな。思わずケチやなあ、と思つてん。えっ、こんだけって」

手に持つ接待袋を見つめるまひる。

大柴「で、そんなこと思つた自分に唾然としてな。ワシは今までお遍路で何を学んだんやろと。その年は自分を戒めるために、途中で切り上げた」

まひる「・・・」

大柴「いつも愛情を受けてばかりだとそれが
当たり前になる。感謝の心がなくなる。ま
ひるちゃんも彼氏に感謝してるか。ブツブ
ツ文句ばかり言っているのと違うか」
まひる、感謝してるよと笑い、やがて真
顔になる。
きらきらと輝く春の太平洋。

24 徳島県美波町・二三番札所 薬王寺

薬王寺山門に入るまひる。
参拝客たち、階段に一円玉を置きながら
登っていく。
まひる、境内のベンチに座り溜息をつく。
突然、若い男に声をかけられる。
高橋祐輔（二四）である。普段着。

祐輔「すいません。隣、いいですか」

まひる「あ、いいよ」

しばらく、佇む二人。

祐輔「歩き遍路ですか」

まひる「仕事。私、雑誌の編集者なんだ」

祐輔「大変ですね」

まひる「もうこんなのに、やめたいなっ」

ふっと笑うまひる。つられて微笑む祐輔。

祐輔、リュックから缶コーヒーを二本出し、一本をまひるに手渡す。

まひる「おっ、気が利く。(一口飲んで)学生さん？」

祐輔「いや、二年前に大学を卒業したんですが、普通に就職するのに疑問を感じて」

まひる「(祐輔を見る)……」

祐輔「働くって何って。で、アルバイトをしながら生活しています」

まひる「働く意味……」

祐輔「結局、分かんなくて。お遍路したら悟るかなあと」

まひる「悟った？」

祐輔「いや、全然」

まひる「社会貢献とか自己実現って言うじゃん。何それって。毎日が忙しく過ぎていくだけ」

まひる、リュックの名札を見る。「高橋祐輔」

祐輔「でも、お遍路してるって心が洗われていくの、実感してます。来てよかったって……」
二人の横をお遍路数人、通り過ぎていく。

25 徳島県美波町・遍路道

遍路道を一人で歩いているまひる。
小学校低学年の女の子二人が近づいてくる。手に菜の花の花束。

女の子「お遍路さん、どうぞ」

まひる「（笑顔で受け取って）ありがとう」
女の子「バイバイ（と去っていく）」

26 東京・出版社編集部

パソコンを眺めている部員たち。
画面。「ぶっ飛び！まひるのお遍路日記（阿波路編）」
焼山寺前の遍路道でひっくり返っているまひる。

指さして笑っている部員たち。

中野「さすが、まひる」

桜川「持ってるわねえ」

美人お遍路、麻未とのツーショット。

部員、すげえ、タレント？との声。

五番札所地藏寺の写真を眺めていた桜川、

首を傾げる。

桜川「あれ？この男、どこかで……」

画面に大柴の顔。

27 高知県室戸市・二四番札所 最御崎寺前遍

路道

字幕スーパ―「高知県室戸市」

一人で歩いているまひる。

28 高知県室戸市・洞窟「御厨人窟」

御厨人窟の看板。

説明書き「空海が瞑想して悟りを開いた

洞窟」とある。

まひる、恐る恐る入っていく。

奥に座禅している祐輔。

まひる「あっ、この前の……何してるの」

祐輔「ここつて、お大師さまが悟られたとい

う有名な洞窟ですよね」

まひる「それにあやかって」

祐輔「はい」

突然、奥で「ちよつとよろしいか」とい

う声がする。

ぎよつととする二人。

僧侶、歩いてくる。曾良幸房（六〇）で
ある。

幸房「あなたは、自分の心をごまかしている」

祐輔「えっ？」

幸房を見つめる祐輔。

幸房「大学の同級生たちは、皆、一流企業に
就職した。でも自分は名のない会社しか受
からなかった」

うつむく祐輔。

幸房「働くこととは何だと考えた。それでお
遍路に出た……（大声で）嘘をつくな！」

祐輔、手が震えている。

そばをお遍路が通る。

誰も幸房に気が付かない。

幸房「嫉妬の心は彼岸（ひが）より生ず。平等を得ればすなわち嫉妬を離る。（につきり）と）自分も人も平等であると悟れば、嫉妬の心も妬みも怒りも消える。他人を妬む心は比較しないと生まれぬ」

うつむく祐輔の眼にうつすら涙。

幸房「あなたの心が暗闇であれば出会うものはことごとく禍となる。あなたの眼が明るく開かれていれば、出会うものは全て宝となる。正しい道は、遠くにあるものではない。あなたの心ひとつで目の前に開かれる。……さあ、お行きなさい」

うなづき、立ち上がる祐輔。

幸房「（まひるに向かって）あなたも同じ」

まひる「えっ」

幸房「違うかな」
顔を見合わせるまひると祐輔。

振り向くと幸房の姿がない。
さつきまで幸房がいたところに、法具の
五鈷杵。
呆然とする二人。
祐輔「あれは・・・お大師さま？」

29 高知県室戸市・遍路宿「蔵空間茶館」食堂

(夜)

「蔵空間茶館」の看板。
畳敷きの広間に十名ほどの宿泊客。
カツオのたたきのお膳。
まひる、麻未、大柴、同じテーブル。

大柴「いやー土佐は、札所の間隔が長いわ。
さ、明日から菩薩の道場、伊予や・・・」

大柴、カツオのたたきを麻未によそう。
大柴「麻未ちゃんも、弱音を吐かず、よう頑
張ってるなあ」

麻未「(笑顔で)はい、何とか」

大柴「こんな別嬪さん、一人で四国に行かし
て、家族も心配してはるやろ」

麻未の表情が曇る。

30 愛媛県松山市・五一番札所 石手寺

石手寺山門。

脇に衛門三郎の石像。

まひる、麻未、眺めていると住職やってくる。

住職「この衛門三郎さんは、伊予の国の豪農
でしてな。でも他人に施すのが大嫌い。
ある日、みすぼらしい僧侶が托鉢に訪れた
のじゃが、叩き落として、鉢は八つに割れ
たそうな」

×

×

×

（イメージ）僧侶の鉢を叩き落とす衛門
三郎。

×

×

×

住職「ところが、この衛門三郎さんの子供、
八人が次々と亡くなった。あのみすぼらし
い僧侶はお大師さまだったのか、と気づい
たた衛門三郎さん、許しを請おうと四國中

を探し回ったが会えない。疲労困憊して、息絶える寸前に、お大師さまが現れた。お大師さまは、『無礼を許して下さい、生まれ変わりたい』との願いを聞き入れ、『衛門三郎再来』と書いた石を握らせた。衛門三郎さんは亡くなった」

× × ×
(イメーჯ) 衛門三郎の手に石を握らせるお大師さま。

麻未「生まれ変わったのですか」

住職「そう。暫くして、『衛門三郎再来』と書いた石を握りしめた赤ちゃんが生まれた。その石はこのお寺にある。だから、この寺は、石手寺と名乗っている」

真剣な表情で衛門三郎の石像を撫でる、まひると麻未。

3 1 愛媛県松山市・道後温泉旅館「茶玻璃」(夜)

旅館の外観。

×

×

×

温泉に浸かっている、まひると麻未。
浴場を走っている小学生の男の子。
後ろに高校生の姉。

姉「そんなに走ると転ぶよっ」

転んで、浴槽に入ってしまった小学生。

男の子「（泣きながら顔だけ出して）助けて！

お姉ちゃん、助けて！」

ほらぁ、と駆け寄る姉。

笑うまひる。

ふと、麻未の顔を見る。

硬直している麻未。頬を涙が伝う。

まひる「麻未・・・ちゃん？」

3 2 同旅館・まひるの宿泊部屋（夜）

コンコン、とノックの音。

麻未「ちよつと、いいですか？」

まひる「あ、どうぞ」

麻未、入ってきてきて、ベッドに二人腰を掛ける。

しばらく、黙っている二人。

麻未「私、泣いちゃって．．．恥ずかしい」
まひる「うん、驚いちゃった」

麻未「私、あの位の弟がいたんです．．．でも亡くなったの．．．津波で」
まひる「えっ．．．」

33 宮城県石巻市・麻未の家（回想七年前朝）

字幕スーパー「宮城県石巻市 七年前」
一階のリビング。

一人で朝食を食べている麻未の弟、啓太（九）。

二階から降りてくる制服姿の麻未（当時十六）

麻未「おはよう」

啓太「（元気よく）おはよう、姉ちゃん！」
あら、元気がいいわねえ、の声。

母、真弓（四二）、身支度をして現れる。

真弓「麻未、あと頼んだわね。今日は病院、夜勤だから帰れないの」

麻未「うん、分かった」

母、玄関出る。

麻未「啓太、早く食べて」

×

×

×

一階のリビング。夕方。

普段着の麻未、ジュースを飲んでいる。

奥の部屋で、おもちゃで遊ぶ啓太。

麻未の携帯、「緊急地震速報」鳴り響く。

突然、大きな地震の揺れ。

麻未、啓太に駆け寄り、抱きしめる。

啓太「姉ちゃん、怖いよー」

麻未「大丈夫だから、啓太」

揺れ、収まる。

麻未「ほらね。あ、家具が・・・」

家具、倒れている。

麻未「うち、お父さん、いないから。大変だ」

家具を直そうと奮闘する麻未。

と、また激しい揺れ。

啓太、倒れた家具の下敷きとなる。

助けようと必死の麻未。

家具、全然動かない。
やがて、ゴ—という音。だんだん近づいてくる。

麻未「何、あの音・・・ちよつと見てくるね」

啓太「（泣きながら）姉ちゃん・・・」

麻未、外に出る。

黒い濁流が迫ってくる。

麻未、家に駆け込み、啓太を助けようとするが、全然動かない。

家に濁流が入り込み、益々水かさが増す。

麻未の胸まで迫る。

麻未、泣きながら、二階に駆け上がろうとする。

啓太「（大声で）助けて！お姉ちゃん、助けて！」

麻未、振り向くが、泣きながら二階に上がる。

3 4 愛媛県松山市・まひるの宿泊部屋（夜）

しばらく、黙っている二人。

麻未「啓太、死んじゃった」

まひる「・・・」

麻未「お母さんは、看護師だったの。でも病院にも津波が押し寄せて・・・お父さんは、啓太が生まれてすぐに離婚して・・・」

まひる「（麻未の手をとり）・・・」

麻未「みんな死んじゃった。お母さんも、啓

太も・・・私、独りぼっち」

まひる「（涙を溜めて）・・・」

麻未「あれから七年経った。その間何をしていたのか、全然思い出せない。で、ふとお遍路しようと思ったの・・・うん、立ち直るためじゃない」

まひる「・・・死ぬため？」

麻未「そう。お遍路に出て、毎日どこで死のうかと考えてる・・・まひるちゃん、私の邪魔しないでね」

微笑する麻未。

じつと麻未を見つめるまひる。

3 5 東京・出版社編集部

桜川のパソコンを眺めている中野。
画面。「ぶっ飛び！まひるのお遍路日記

（伊予路編）」

石手寺のお遍路さんたち。

衛門三郎の石像。

中野「まひる、次はいよいよ讃岐か」

桜川「頑張ってるわね・・・でもちよつと疲
れているかな」

3 6 徳島県三好市・六六番札所 雲辺寺

雲辺寺麓のロープウェイ乗り場に、ま
ひる、麻未、大柴。

大柴「ワシ、ここはロープウェイって決め
てまんねん。（おどけて）坂が急なさかい」
まひる「（呆れて）私、思うんですけど、師匠、
芸人になったらどうですか」

大柴「（真顔で）芸人・・・」

3 7 徳島県三好市・六六番札所 雲辺寺 遍路道

急峻な山道を登るまひる。
ハアハアと荒い息遣い。
白装束姿。手に金剛杖、頭に菅笠。
樹木が生い茂り、薄暗い山道。
すれ違うお遍路たち。
ますます荒くなる息遣い。
と、石に躓き、崖から転落する。

38 徳島県三好市・遍路宿「うんぺんじ」まひ

るの宿泊部屋

寝ているまひる。

枕もとに薬箱と水。

若い男、入ってくる。高橋祐輔である。

まひる、気が付いて、

まひる「あれっ？ここはどこ？・・・あ」

祐輔「大丈夫？雲辺寺の遍路道で、崖から落

ちたらしいよ」

まひる「えっ！」

祐輔「綺麗な女の人が助けに来てたって」

×

×

×

崖から落ちたまひるを介抱する麻未。

×

×

×

まひる「また麻未ちゃんに」

祐輔「足をくじいただけで、骨折はしていないな

いって。でも二週間はそのままです」

まひる「えっ、二週間も」

祐輔「うん・・・で、僕、もうお遍路辞めて

帰ろうかと。就活です」

祐輔、バッグから、法具の五鈷杵を出す。

まひる「お大師さんに叱られたから（と笑う）」

×

×

×

38

まひると祐輔に説話する幸房。

×

×

×

祐輔「嫉妬心は、無くさないかね」

まひる「頑張ってます！」

立ち上がろうとして、苦痛に歪むまひる。

祐輔「あ、そのままです。じゃ、お大事に」

天井を見つめるまひる。

桜川、電話をしている。

桜川「えっ、そりゃ、大変ね・・・うん・・・
うん・・・いや、気にしないで、何とかす
るから」

電話を切り、隣の中野に、

桜川「まひるが怪我した。二週間動けないっ
て」

中野「えーっ！スペース埋めないと」

桜川「そっちかい。体調心配してあげて」

40 徳島県三好市・遍路宿「うんぺんじ」まひ
るの宿泊部屋

手紙を書いているまひる。

41 東京・出版社編集部

パソコンを眺めている中野。

画面。「ぶっ飛び！まひるのお遍路日記」
の読者投稿欄。

『まひるちゃん、早く良くなつて！』『毎
週、楽しみにしていたのに。残念！』

中野「すっかり、人気者になっちゃって」
桜川「うん、次の副編集長は、まひるね」
中野「えっ、何言ってるの」
桜川「ふふっ。私、これなの（と、妊娠のしぐさ）」
中野「これ！（同じく妊娠のしぐさ）」
桜川「次を任せられるのは、まひるしかないない」

4.2 東京・翔太のアパート（夜）

手紙を読む翔太。

まひるの声『翔太へ。この前は、お遍路やめると愚痴を言って、ごめんなさい。最初は、なぜこんなことをしなければならなかったと不満でした。毎日歩き続けるのもつかった。でも様々なお遍路さんたちの出会いはありました。お接待で、いろんなものをいただく、本当にありがとうございます』

×

×

×

お寺で談笑するまひる、大柴、麻未。

接待で、お菓子とドリンクを貰うまひる。

×

×

×

まひるの声『私はこの人たちのように人に親切にしたかどうかと反省の毎日です。お遍路は、自分に向き合う修行の場です。感謝の心、自分より周りの人々を大切に思う心を遍路を通して学びました。今までの私は、自分勝手に独りよがりでした。自分の重い心をもてあまして、それを他人のせいにしていました。

×

×

×

アパートで翔太に毒づくまひる。

×

×

×

まひるの声『お遍路の魅力は、いくら本を読んでも分からない。自ら歩いて初めて分かるものだと思います。翔太、まひるらしくないって笑わないでね。無事帰ったら、よく頑張ったなって褒めてね。嘘です。今は翔太の顔を早く見たいな』

机の上の四国遍路雑誌を広げる翔太。

43 香川県三豊市・七一番札所 弥谷寺

弥谷寺山門前に、まひる。麻未、大柴。

大柴「まひるちゃん、もう良くなったの」

まひる「はい、お陰様で」

大柴「あれっ、言葉遣いが違うな」

まひる「師匠、麻未ちゃん、待ってていただけ
いて、すみません（頭を下げる）」

大柴「もう、家族みたいなもんだ。なあ、麻
未ちゃん」

麻未「はい」

皆、笑う。

× × ×

弥谷寺の中腹、賽の河原に着く。

麻未、『宮下啓太再来』『宮下真弓再来』
と書いた石を置く。

まひる「これは・・・石手寺の」

麻未「衛門三郎伝説です。生まれ変わりの」

まひるも石を拾い、麻未のペンを借りて

『河合和子再来』と書く。

訝し気に見る麻未。

まひる「お母さんのね。麻未ちゃん、家族を

突然亡くしたの、貴方だけじゃない」

はっとする麻未。

まひる「私が五歳の時」

×

×

×

交通事故でぐしゃぐしゃになった乗用車。

×

×

×

まひる「即死だった」

へアアクセサリーを取るまひる。

まひる「これ、お母さんがくれたの。お揃い

で・・・生きたくても生きられない人間が

いる」

まひる、いつになく厳しい表情。

まひる「人間って・・・」

まひるを見つめる麻未。

まひる「皆、苦しみを抱えて生きてる」

麻未の眼から涙がこぼれる。

まひる「なーんちゃって。ごめん。私らしく

ないな（と笑う）」

突然、奥で「ちよつとよろしいか」という声がする。

僧侶の幸房、歩いてくる。

まひる「（つぶやく）お大師さま」

幸房「狂人は狂せることを知らず、四生の盲者は盲なることを識らず。生まれ生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し」

二人、黙って幸房を見つめている。

幸房「人は何度も生まれ変わりながら、いったい何処から生まれたのか知らない。生まれてはまた死んでいくのに死の意味を知ることがない」

まひる「我々は生まれたのでもなく、死ぬんでもない」

幸房「（麻未に）弟さんやお母さんは死んで無くなったんじゃない。死んでは生まれ、また死ぬ。（まひるに）貴方のお母さんもそうじゃ」

二人、幸房に頭を下げる。
頭を上げると、幸房の姿がない。
さつきまで幸房が居たところに、法具の
五鈷杵。

まひる・麻未「お大師さま」

4 4 香川県観音寺市・お遍路休憩所

字幕スーパ―「香川県観音寺市」

観音寺市の遍路道を歩くまひると麻未。

お遍路休憩所の看板を見つけ、入る。

テーブルにお菓子とお茶のセット。

お茶を飲んでいると、奥から西田今日子

(七三)出てくる。

まひる「あ、お邪魔しています」

西田「どうぞどうぞ。どちらから」

まひる「東京です」

麻未「宮城県です」

西田「まあ、遠いところから」

まひる、お腹すいたと言いながら、お菓
子を食べる。

笑ってみている西田。

西田「私、広島生まれだけど、結婚して香川に引っ越したのね。亡くなった姑がこのお遍路休憩所を開いたの」

うなづくまひると麻未。

テーブルにノート。

西田「そこにノートがあるでしょ。お遍路さんがいろんなことを書いているのね」
ノートを手に取る麻未。

西田「悪いとは思いながら、見ていたら、皆、色んな想いを背負ってお遍路してるの」

西田を見る麻未。

西田「亡くなった方の供養や家族の病気が治りますようにって」

麻未「供養って多いんですか」

西田「そうね。ほらここ（と示す）」

ノート。

『息子が亡くなって三年。お遍路に出たものの、悲しみは増すばかり』

『母の供養にお遍路しています。お接待

に癒される毎日です』

ずっとノートを見ている麻未。

西田「お大師さまは、こんなことをおっしや
ってるの。『毒箭を抜かずして、空しく来処
を問う』。毒矢が体に刺さっているのに、誰
がこんなことをしたのかと犯人捜しをし
ているうちに、毒が体中に回って死に至る」
そつと二人の肩を叩く西田。

西田「お大師さまは、自分を苦しめているの
は何か、何で自分だけが不幸か、理由ばか
り考えないで前に進みなさいとおっしや
ってるの」

溜息をつく二人。

西田「辛いよね。前に進むって」
うなづき、涙をぬぐう二人。

45 香川県善通寺市・七五番札所 善通寺

善通寺の仁王門。

広大な境内。

まひる、大柴、参拝している。

お大師さまの「産湯の御水」を見る。
地下の戒壇巡りでお大師さまの声を聴く。

大師堂から納経所まで歩く二人。
と、テレビの撮影クルーが現れ、二人に近づく。

レポーター「皆さん、こんにちは。RNC街角インタビューの時間です。今日は、お遍路さんで賑わう、善通寺にやってきました。では、早速」

レポーター「大柴に近づいて、
レポーター「すみません、ちょっと宜しいですか？」

大柴「あ、はい」
レポーター「どちらから来られたのですか？」
大柴「大阪からです」

まひる、ちよっと離れたところに立つ。

× × ×

インタビュー終わり、機材を片付けようとするカメラマン。大柴を見て、

カメラマン「あれっ、タブー大柴さんじゃな
いですか」

大柴「誰、それ。違うよ」

カメラマン「いや、絶対そうですわ」

大柴「・・・ようわかったな。もう引退して

二十年になるけど」

カメラマン「やっぱり。小学校のころ、テレ
ビでよう見てましたわ・・・すみません、

あのタブーポーズ、お願いします」

大柴「えっ、此処で？かなわんなあ」

タブーポーズを見せる大柴。

遠巻きに見ていたおばちゃんたち、寄っ

てきて「タブー大柴や」と握手攻め。

まひる「（苦笑して大柴の背中を叩き）やっぱ
り師匠・・・だったんですね」

46 東京・出版社編集部

テレビを見ている桜川。

画面『タブーポーズを見せる大柴』

桜川「あの写真に写っていた男、タブー大柴

だったのか」

（インサート）徳島県板野町・五番札所
地蔵寺での集合写真。

47 香川県坂出市・五色台遍路道

瀬戸内海が展望できる遍路道を歩くま
ひると麻未。

休憩所のベンチに座る。

遠くに大槌島、小槌島が見える。

麻未「私、死ぬのやめます」

麻未を見つめるまひる。

麻未「辛いのは私だけじゃない。皆、苦し
み、悲しみを抱えて生きているんだなっ
て」

麻未、立ち上がって叫ぶ。

麻未「お母さん！啓太！」

座る麻未。

麻未「そんなこと当たり前なのにね。お遍
路に出るまで分からなかった。まひるち
ゃんや大柴さんと出会えたのは、お大師

さまのお導きだと思いの」

まひる、立ち上がったって叫ぶ。

まひる「お母さん！」

笑うまひると麻未。

座るまひる。

麻未「自分は一人で生きているんじゃない。

四国遍路は、頑な心を柔らかくするお薬ね」

まひる「私も自分と向き合うことなく大人になつた。こんなに自分を客観的に見つめる

ことは、今までなかったと思う」

穏やかな瀬戸内海を客船が進む。

48 香川県高松市・八二番札所 根香寺

まひる、麻未、大柴、参拝している。

山門前の高さ4m巨像、牛鬼。

長い階段を上り、本堂へ。

三万体の黄金観音。

お賽銭をあげ、祈る三人。

まひるの携帯が鳴る。祐輔からである。

まひる「祐輔くん、まひるです……はい……

はい・・・（表情が明るくなり）良かったじゃない！おめでとう・・・うん、頑張っ
ね」

まひる、携帯をしまいながら、
まひる「お遍路で一緒になった人が、就職出
来たって」

大柴「良かったやん」

まひる「大学卒業して、就職もせずアルバイトで生活してたの。で働くなってなんだろうとお遍路に。でも高知でお大師さまに嫉妬心無くせ、と叱られちゃって」

大柴「やっぱりお大師さまは偉い・・・え？」

うなづく麻未。

大柴「えっ、麻未ちゃんも会ったの。ワシだけかあ、こんだだけお遍路してんのに」

まひる「修行が足らんなあ」

ずっこける大柴。

笑うまひると麻未。

まひる、麻未、大柴、境内に入る。

住職、本堂前にある「地獄の釜」という石の祠で参拝客に説明している。

住職「一宮寺には地獄の釜があります。悪いことばかりしている人は、この中に頭を入れると、閉まって抜けなくなります」
まひる「面白そう」

地獄の釜に近づく三人。

住職「昔、おタネさんという意地悪なお婆さんが頭を入れると、扉が閉まって、ゴォーッという地獄の音がしてきた。慌てて頭を抜こうとしたがなかなか抜けられない。おタネさん、とうとう涙を流しながら『今までのことは許してください。もう意地悪はしません』と何回も頼むと、やっと扉が開き、すっと抜けた」

（インサート）慌てるおタネさん。

聞き入る三人。

住職「その後、おタネさんは、心を入れ替え、近所の人から親しまれるようになったそうじゃ。めでたし、めでたし」
「ありがとうございます、めでたし、めでたし」
参拝者たち。

住職「(三人に)どうぞお試してください」

大柴「うん、まひるちゃんだな」

まひる「何ですかあ、師匠。私、何も意地悪してませんよ」

大柴「だったら、試してみたら」

まひる、恐る恐る祠に頭を入れる。

大柴、横で「ゴオーツ」と大声。

まひる「(頭を抜き、神妙な口ぶり)今ま

でのことは許してください。もう意地悪は
しません」

大柴「よろしい」

見守っていた参拝者たち、笑う。

50 香川県さぬき市・八八番札所 大窪寺

大窪寺の山門。

まひる、麻未、大柴、一礼して山門に入る。

三人、金剛杖を納める。

まひる、皆に向かつて、

まひる「お遍路して、人はみんなに助けられ

て生きていくものだ実感しました。古い

自分は捨て、新しい生き方を目指します」

大柴「よく癒しのころというが、遍路に出

るということは、要するに自分が何者か知

りたいんだよ。自分が何者か知らないで死

ぬことがたまらないんだよ」

× × ×

（インサート）高知の海岸遍路道を歩く三人。

（同）根香寺で参拝する三人。

× × ×

麻未「お遍路は、重いものを捨て、軽くなっ

ていくことだと実感しました。私、もう、

後ろは振り返らないです」

おばちゃん数人、大柴に近づく。

タブー大柴やと口々に言い、握手を求め
る。

大柴「（握手して、頭をかきながら）ワシ、ま

た、お笑い芸人やろうと思ってまんねん」

おばちゃんたち、頑張つてと拍手。

三人、握手をして、手を振り別れる。

まひる、一人になったところで、翔太、
現れる。

まひる「翔太！なんでここに」

翔太、微笑してまひるに近づき、ハグ。

翔太「よく頑張ったね」

まひるの眼から涙がこぼれる。

まひる、ふと顔をあげる。

山門に僧侶。幸房である。

まひる「（幸房に近づき）お世話になりました。

無事、結願しました」

幸房「よう頑張ったな（と笑顔）」

翔太、駆け寄る。

翔太「（周りを見渡し）え？誰と話してるの？」

まひる、ふふつと笑う。

幸房の姿はない。
怪訝な表情の翔太。

5 1 東京・まひるのアパート（朝）

ベッドで寝ているまひる。
隣に翔太。
起こさないようにそっとベッドから出る。
翔太を振り返って笑顔。
机の上に、大窪寺で撮った二人の写真と
法具の五鈷杵。
二人の背後に、僧侶の幸房、笑顔で映っている。

5 2 東京・出版社編集部

部員、仕事中。
窓際に中野と桜川。
まひる、入ってくる。
全員、立ち上がって拍手。

中野「お疲れさん」

桜川「頑張ったわね」

まひるが着席するや否や、

中野「早速だけど、次、スペインに行ってく

れるか」

まひる「はあっ！（と立ち上がる）」

中野「例の四国遍路がめっちゃ好評でね。売

り上げ五割アップ。社長直々のご指名なん

だよ」

桜川「スペインのキリスト教巡礼の旅ね」

「まひるならやれるよ」「よっ、お遍路の

プロ」との部員の声。

まひる「やります！（とガッツポーズ）」

中野「頼んだよ！副編集長！」

まひる「えっ？（桜川を見る）」

Vサインの桜川。

部員たち、拍手。

戸惑いながら、やがて笑顔になるまひる。

テーマソング、流れて。

— エンドロール —

